

◎「宇治市高齢者アカデミー 5期生 卒業研究発表会」の開催

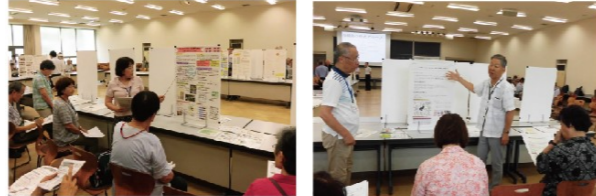
2年間の学びの成果を発表

7月10日(水) 京都文教学園宇治キャンパスで「宇治市高齢者アカデミー5期生卒業研究発表会」が開催されました。宇治市高齢者アカデミーは、宇治市と京都文教大学・京都文教短期大学が連携し、宇治市在住の65歳以上を対象としています。本学の学生と一緒に授業を履修し、またアカデミー生同士のゼミ活動を通して、本学の専門的な学びだけでなく、地域やまちづくりに関することについても理解を深められています。2017年9月に入学されたアカデミー5期生は、2年間の学びの成果として、「地域社会」「文化歴史」「防災」「福祉」「環境問題」など多岐に渡るテーマで、個人研究15件、グループ研究6件の合計21組の研究が、ポスターセッション形式で発表されました。当日は、教職員や学生、アカデミー卒業生など100名以上の方にご来場いただき、熱のある発表が繰り広げられました。また8月に宇治市役所市民ギャラリーにて「宇治市高齢者アカデミー5期生 卒業研究ポスター展」を行い、2年間のアカデミー事業の学びの成果を多くの市民の方へ発信いたしました。



◀研究テーマ一覧▶

- ①「宇治が輝いた時代」の発掘と多様な活用
- ②宇治の地域文化: 宇治茶の品種を考える
- ③仏教と植物そして香り
- ④共生社会の実現のために私が考え知り行動しなければならないこと
- ⑤自治会は必要なの？
- ⑥大地震から命をまもるために。あなたは大丈夫ですか？
- ⑦プラスチックゴミによる環境汚染問題(私達にできるプラゴミ大作戦)
- ⑧老後を生き生きと
- ⑨誰もがいつか迎える「その時」のために！
- ⑩健康寿命をのばしましょう！
- ⑪高齢化社会と言われる社会にあって
- ⑫高齢者によるボケと認知症
- ⑬高齢者の社会的交流を促進するために～コミュニケーションの心理学から～
- ⑭若者と高齢者が安全に安心して暮らせる地域社会を目指すにはどうしたらよいかの検証
- ⑮くらしの中の危機管理、若者と高齢者の違い
- ⑯認知症とは
- ⑰エリザベス・キュウボラー・ロスの生涯から学ぶもの
- ⑱長期的な光放射が平等院鳳凰堂の浄土空間に及ぼす影響について
- ⑲日米地位協定と「シランフナー」～沖縄の基地問題と「人ごと論理」(見て見ぬふりをする)～
- ⑳入浴の歴史
- ㉑心を支えた金言(元氣、優喜、やる気のもと)



イベント開催のお知らせ

子どもからご年配の方、障がい当事者や留学生など、様々な人が集い、交流できる地域のみなさんを対象とした大学開放イベント!

ともいき(共生)フェスティバル 2019

- 日時: 2019年12月14日(土) 10:00~16:00
- 会場: 京都文教大学・短期大学 サロン・ド・パドマ 他

<内容(予定)>
 ◎「ともいき(共生)キャンパス スタンプラリー! ◎家族で、もちつき大会
 ◎小学生集まれ!楽しく学ぼう!大学生・教員による「わくわく科学体験」「算数で遊ぼう」「つくって遊ぼう」「ふるさと宇治検定」×クイズ
 ◎子どもアートにチャレンジ!10,000個の紙コップワークショップ
 ◎地元企業によるワークショップ ◎地域の住民・団体によるワークショップやステージ発表
 ◎京都文教大学生によるお茶の淹れ方体験 ◎子ども野球教室
 ◎宇治茶文化講座や講座「認知症について」などのワークショップやミニ講座
 ◎京都文教短期大学幼児教育学科プレゼンツのぶんきょう子どもひろば2019◎
 (宝探しゲーム/クリスマス飾り/プラン/手作りボーリング/ふれあい遊び/スライム/キャンドルカップ/ハイチース/ペーパーサート/
 コンサート/劇あそびミュージカル/作品展/など ※ゲストパフォーマー、風船師ヨッシーさん来場!(14:00~15:00)
 ※入場無料。ただし、一部ブースや模擬店や物販は有料



京都文教大学 地域協働研究教育センター

ともいき vol.17
 NEWSLETTER TOMOIKI 2019年9月発行

「京都府南部地域 ともいき(共生)キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。



2019年度 地域志向教育研究 ともいき研究助成事業
2019年度 地域志向協働研究 共同研究プロジェクト

地域を志向した研究を推進！ 地域とともに研究に取り組めます

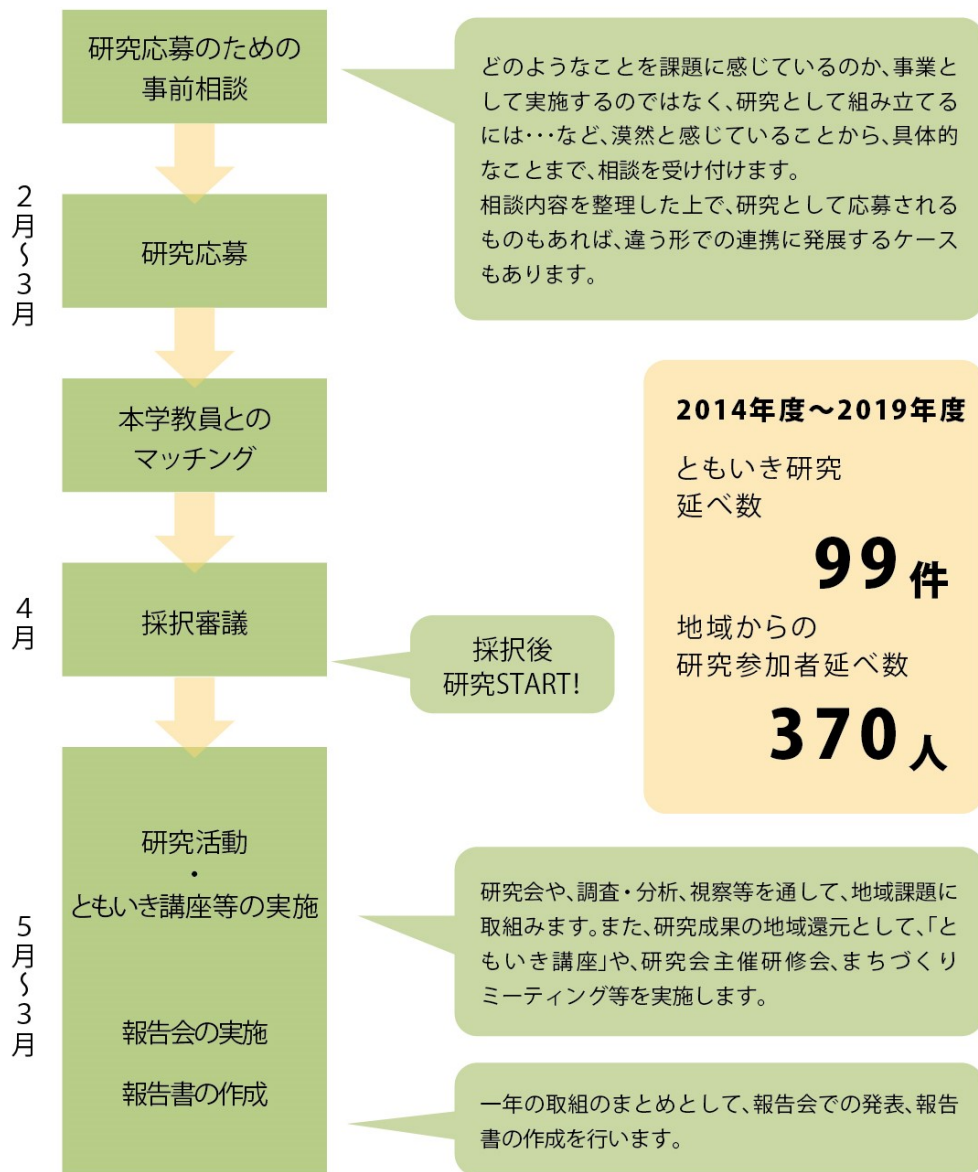
地域における本学の教育、研究、社会貢献活動を一体化し、その成果を本学の教育活動や地域の発展に還元、寄与することを目的に、2014年度から始まった「地域志向協働研究」・「地域志向教育研究 ともいき研究助成事業」(以下、両研究の総称として「ともいき研究」と表記)。本学の学問特性を活かし、地域福祉、保育、教育、まちづくり、観光、地域コミュニティ、防災など、様々な分野の研究をこれまで行ってきました。

「ともいき研究」では、本学教員のみならず、地域の方からも研究を募集し、本学教員とのマッチングを行うことで、共同研究を行っています。地域の方が感じているニーズや課題、大学と協働したいと考えている事項を把握する機会ともなっています。また、各研究テーマに基づいた「ともいき講座」(公開講座)やまちづくりミーティングを開催し、地域課題の共有、研究成果の地域還元にも努めています。

大学の持つ様々なリソースを活かしながら、住民、企業、行政、各種団体等、地域パートナーと協働して、地域の課題に取り組んでおり、今年度は、17件の共同研究プロジェクトと1件の個人研究プロジェクトが採択されました。

次ページからは、今年度採択された研究の概要と、共に研究に携わる研究分担者や協力者の地域パートナーの皆さんをご紹介します。

■ともいき研究の流れ



「ともいき講座」で広く発信



学生もグループミーティングに参加



「まちづくり」ワークショップ



ともいき研究・宇治市政策研究 合同成果報告会

プロジェクト1 ともいき研究

ボランティア担い手開拓と活動効果測定の研究 －勤め人Vメニュー開発とQOL向上指標の導入

研究代表者：杉本 星子 (総合社会学部総合社会学科 教授)

学内研究員
1名
学外研究員
6名

本研究の目的は二つあります。一点は、会社員・公務員のボランティア活動の振興です。日本では、主婦や退職者など比較的時間のゆとりのある人の社会活動の印象がありますが、勤め人の参加機会を提供する方策を探るため、宇治市職員労働組合とユニチカ労組、宇治鳳凰ロータリークラブ、宇治ライオンズクラブの協力を得て調査集約し、提言化を行います。二点目は、ボランティア活動の相手の生活の質の向上に向け、活動の充実を図ることです。手話ボランティアの「太陽」、朗読ボランティアの「URV」が聴覚・視覚障害者の社会参加度をインタビューで聞き取り調査し、現状と課題を相互に把握し、ボランティア活動の方向性の共有化や効果測定に資します。

地域パートナー



曾谷 武さん
(宇治ボランティア活動センター運営委員会監事(前委員長))

会社員が、通勤の途上やスキマ時間を使って、独居高齢者の電球代え、ゴミ出し等、ボランティア活動ができる仕組みや支援を考えていくために、ユニチカ労働組合に協力してもらい、調査に取り組んでいます。社員の地域社会貢献力の向上は、企業にとってもメリットであり、ライフ・ワークバランスの向上にもつながります。また、社員とボランティア活動団体が、一緒に考えていく協働のプロセスそのものに大きな意義があります。

プロジェクト2 ともいき研究

宇治市における「ものがたり観光」の振興と定着 II

研究代表者：片山 明久 (総合社会学部総合社会学部 准教授)

学内研究員
2名
学外研究員
4名

宇治市は源氏物語宇治十帖の舞台であり、その世界観を味わう観光が江戸時代より行われてきました。近年では、宇治市出身の作家武田綾乃氏による「響け！ユーフォニアム」が発表され、若いファンがその世界観を味わう観光を楽しんでいます。またその世界観の下、吹奏楽やイラスト作成など自らが表現者になって楽しむ人たちも見られるようになってきました。この研究会の目的は、これらの観光を「ものがたり観光」と名付け、それをさらに振興させる方策を検討し、宇治における「ものがたり観光」の定着を図ることです。そのために、シンポジウムの開催などを通して、両作品の魅力を多様な側面から再評価し、新たな観光の喚起につなげていきたいと考えています。

地域パートナー



多田 重光さん
(公益社団法人 宇治市観光協会 専務理事)

今日宇治には560万人の観光客が訪れ、海外のお客も継続して増えています。しかし観光客の方々に、まだまだ本当の宇治の魅力を伝えきれているとは言えません。宇治を舞台とした「源氏物語宇治十帖」の魅力的な世界観も楽しんでいただきたいですし、近年では「響け！ユーフォニアム」ファンの方に数多く訪れていただいております。宇治観光の新しい側面に注目していただけるチャンスだと認識しています。この研究会の取組が、宇治の新しい観光の喚起につながることを期待します。

プロジェクト3 ともいき研究

フューチャーデザイン手法で考える 持続可能な宇治の地域コミュニティのあり方

研究代表者：森 正美 (総合社会学部総合社会学科 教授)

学内研究員
3名
学外研究員
12名

宇治市においては、近年、町内会・自治会の加入率の低下、役員層の負担の増大や少子高齢化による担い手不足など、コミュニティ活動上の様々な課題が存在し、複雑化しています。本年度は、これまでの共同研究の成果を踏まえ、市民と共に、フューチャーデザインによる宇治市の地域コミュニティのあり方について検討します。今年度の研究を通じて、地域の連携や活性化に向けた市民の意識向上と合意形成の手法、またフューチャーデザインの視点を取り入れた官民学協働での地域コミュニティの課題解決手法について研究を行います。

地域パートナー



杉本 隆之さん
(宇治市産業地域振興部文化自治振興課)

地域コミュニティを取り巻く課題が多様化するなか、これまで様々な視点を用いた研究や市民参加型のワークショップを展開してきました。本研究においては「フューチャー・デザイン」という未来の視点を取り入れた手法を用い合意形成の手法を探る他、市民活動団体との連携強化を図ります。また、官民学協働で地域コミュニティの課題解決手法について検討することで、地域の連携・活性化に向けた市民の意識・主体性の向上に繋がることを期待します。

プロジェクト4

ともいき研究

グローバル化時代における地域の国際協力のあり方を探るⅢ

学内研究員 3名
学外研究員 6名

研究代表者：安田ひろみ（総合社会学部総合社会学科 准教授）

共同研究者

松田 凡さん
（京都文教大学名誉教授）



テニスの大坂なおみ選手をやたらと「日本人初の……」ともてはや論調に、どこかしっくりこないものを感じていた昨年。今年もサニブラウン・ハキム選手、八村塁選手などスポーツ界はにぎやかだ。もちろん個人の業績には敬意を払うとして、活躍する「ミックスルーツ」のスポーツ選手と身近な外国人労働者に対する私たちの意識とを比較することで、多数派日本人の思考の一端がわかるように思う。こんな研究会もしたいですね。

外国人住民と地域住民とのより細やかな多文化共生を模索するプロジェクトです。地域パートナーは、国際協力や日本語教育の現場で活動しています。3年目の今年は、昨年に続き災害時の外国人支援のための「やさしい日本語」ワークショップ開催等の他、日本語教育学会などにメンバーを派遣して、外国人に関わる専門的研究や各地での取り組みの成果を現場に取り入れ、活動のヒントにして貰えればと思っています。

少子高齢化で外国人労働者のさらなる導入が不可欠な現代、職場でも町でも学校でも外国人が安心して生活し、日本人も多様な文化を取り入れて心豊かに過ごせる社会の実現を目指します。

プロジェクト5

ともいき研究

自殺予防および精神障がい当事者のリカバリープロセスと社会貢献に関する探索的研究

学内研究員 1名
学外研究員 4名

研究代表者：松田 美枝（臨床心理学部臨床心理学科 准教授）

地域パートナー

小嶋 佳余さん
（ピアサポートグループともとの会）



心の病を抱えながら暮らしている私達がリカバリーしてきたプロセスを明らかにし、ストレスの多い現代社会において未だ苦しんでいる仲間たちに、「一人ではないよ。ここに仲間がいるし、あなたはこの世にかけがえのないたった1つの命だよ」というメッセージとともに伝えられたら…。自分の中に、小さくても希望の光を感じられることができれば、日本の自殺者（未遂者を含む）はもっと減らせるのじゃないか、と思っています。

病气や障がいをもつ人はもとより、人生の途上で困難に直面し、絶望や挫折を経験することは、誰にも起こりうることです。そのような時、自分の周りにSOSを出せる仲間との繋がりがなく孤立が深まると、最悪の場合「自殺」という選択をとることもなりかねません。

本研究では、精神障がいを持つ当事者の視点から、それぞれのリカバリープロセスに着目し、お互いの経験や知恵を出し合う中で、互いの学びや気づきを整理し、可視化して、誰もが自分らしく生きられる地域づくりのヒントを抽出します。また、その取り組みを通して、障がい当事者自らのリソースを活用し、社会参加できる場の提供を行います。

プロジェクト6

ともいき研究

宇治市認知症アクションアライアンスに関する当事者研究Ⅳー「認知症の人にやさしいまち・うじ」の実現に向けてー

学内研究員 1名
学外研究員 5名

研究代表者：平尾 和之（臨床心理学部臨床心理学科 教授）

地域パートナー

森 俊夫さん
（京都府立洛南病院 副院長）



「認知症のひとにやさしいまち・うじ」を実現するためには、認知症当事者の声を聴き取る方法論と、それを具体的な形にする方法論の確立が求められます。本研究の「グループミーティング」を中心とする3年間の蓄積は、その二つの方法論の基礎を確立しました。世代を超える象徴としての学生の存在と方法論の確立が、参加者の拡がりや深化を生みだし、今年度は企業の参加が実現しました。新しい次元へと歩を進める1年に期待します。

高齢者の5人に1人が認知症を患う時代を迎えるにあたって、認知症と共に生きていく社会の実現が課題となっています。宇治市は全国に先駆けてこの地域課題に取り組み、2015年に「認知症の人にやさしいまち・うじ」を実現することを宣言しました。2016年より始動した宇治市認知症アクションアライアンスでは、認知症のご本人やご家族の体験にもとづいたニーズや評価をいかに施策に反映していくかがテーマになっています。本研究では、宇治市、宇治市福祉サービス公社、洛南病院、そして認知症当事者チームと協働し、認知症当事者の声を聴き取り活動していく方法論の確立を目指します。

プロジェクト7

ともいき研究

世界児童画展を通して考える子どもの「表現」とは

学内研究員 2名
学外研究員 2名

研究代表者：平野 知見（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

地域パートナー

新関 日出夫さん
（公益財団法人 美育文化協会）



1970年、大阪万博の世界児童画展ブースに現在の上皇上皇后陛下にご臨席いただいたことを機に第一回世界児童画展がスタートしました。毎年国内から約5万点、海外からは40を越える国と地域から約5万点（日本人学校含む）、計約10万点余りの児童（3歳～15歳）の絵画作品が応募されています。昨年度より京都文教大学で京都・奈良・滋賀県展を開催しています。全国から応募された児童の入選以上の作品を展示して入賞の喜びを皆で共有するとともに絵を描く活動の地域活性化の為に。ぜひ今年第49回世界児童画展をご覧ください。

昨年度初めて世界児童画展（京都・奈良・滋賀展）を本学サロン・ド・パドマにて週末開催し4日間展示しました。同時にギャラリートークや「1万個の紙コップアートWS」を開催し、教育福祉心理学科の学生らにはWSを担当してもらうなど入選した地域の子もたちや保護者や祖父母の方と一緒にアートを楽しむ、連日満員御礼でした。今年度も継続し、地域の入選した関係者（こども・大人）だけではなく、地域の人たちに日本内外の子もたちの「表現」に触れ、その表現から世界の文化にも触れる機会をつくることを目的としています。また子どもの「表現」に関わる全ての人に提供できる「子どもの絵・モノの見方」について研究し記録としてまとめ、現場保育者へ還元できればと考えています。

プロジェクト8

ともいき研究

記者体験活動を通して、子どもたちのシティズンシップを育成する研究

学内研究員 1名
学外研究員 4名

研究代表者：橋本 祥夫（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

地域パートナー

奥井 凜さん
（洛天新聞記者・一般社団法人京都子ども記者クラブ代表理事）



研究事業を母体に法人を設立しました。地域の皆様から「子ども記者クラブ」活動への期待が多く寄せられています。法人の存在意義は、子どもが自分の人生や社会において主体的に生きられるよう、調べ考える力を育むことです。それが、地域社会の担い手として育っていく基礎になると信じています。仲間と共に、実践を続けていきます。

本研究では、子ども記者クラブによる記者体験活動を手法として、地域の情報を発掘し、子どもたちの目線で発信することで、子どもたち自身が自分たちの住む「まち」に愛着を持ち、地域の一員として地域に貢献しようとするシティズンシップを育成することを目的としています。2019年3月に、一般社団法人京都子ども記者クラブが設立し、地域の様々な団体、企業と連携した取り組みをより一層推進していきます。シティズンシップの育成を通して、地域の活性化を目指します。

プロジェクト9

ともいき研究

まきしま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造Ⅱー地域と結びつく親と子の絆づくり、子どもへの学習支援ー

学内研究員 4名
学外研究員 3名

研究代表者：寺田 博幸（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

地域パートナー

櫃田 尚美さん
（Reos 横島）



子どもの食事難や孤食に対する問題は、親の就職状況や家庭状況が深く関連しているため、根本的解決方法を見つけることが難しいのが現状です。京都文教大学の先生と学生さん、地域の主婦の力をお借りし、学習支援や食事の提供をすることで、少しでも問題解決に向けて日々取り組んでいます。最近では、地元の方からたくさんの寄付もあり、活動の幅も広がりました。今後も子ども達が安心して利用できる居場所づくりを目指し定期的に開催していきます。

これまでの5年にわたるCOC事業としての研究「子ども学習支援プロジェクト」を振り返り、参加する子ども達に居心地のよい居場所を提供し、学習支援と子ども食堂を一体化させた「学習支援 in つながりひろば」として研究を行っています。放課後の安全・安心な子どもの居場所としての機能だけでなく、大学と地域、保護者、宇治市の連携が子どもの自己肯定感を高め、家庭学習に意欲的に取り組むような支援プロジェクトになるよう、学生や地域の協力者スタッフと爽やかな汗を流しながら研究を進めています。

プロジェクト10
ともいき研究

障がい当事者のリソースを活用した教育と
まちづくりに関わる発展的研究

学内研究員
2名
学外研究員
10名

研究代表者：松田 光一郎（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

昨年度まで実施した「障がい当事者のリソースを活用した教育とまちづくりに関わる実践的研究」（ともいき研究）の実績に基づいて、学生や援助専門職や地域住民への社会福祉教育に障がい当事者が参画する取組と、障がい当事者の個性や特性を生かしたまちづくりの取組との連携をさらに発展させて、障がい当事者のリソースを生かしたインクルーシブなまちづくりの活動拠点を向島ニュータウンをはじめとした京都府南部地域に構築することが目標です。また、以上の取組を通して、地域包括ケアに関わる教育研修とインクルーシブなまちづくりや、学生への現場実践主義教育の場の拡大や質の向上等も目指します。

地域パートナー

佐藤 雅裕さん
（京都市南部障がい者地域生活支援センター「あいりん」）



「虹のようにいろいろな色があっていい」との願いを込め、障がい当事者が中心となって立ち上がった「にじいろプロジェクト」は、多様性の認め合える地域づくりが目的です。活動の一つである防災ワークショップでは、個別避難計画を地域の自主防災会等と一緒に作ることで、地域の方からもいろいろな提案を頂くことができ、障がい理解に加え、地域を知る良い機会となりました。災害時でも支え合える関係性につながるように、今後も出会う機会にしかけを作っていきたいと思えます。

多文化多世代共生の地域コミュニティを考える
—大学・事業者・住民連携による
ニュータウンまちづくり推進事業を中心とした実践的研究

プロジェクト11
地域志向協働研究

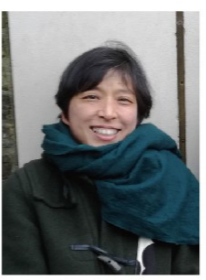
学内研究員
5名
学外研究員
6名

研究代表者：杉本 星子（総合社会学部総合社会学科 教授）

京都市伏見区向島地域の住民と事業者、行政、大学が連携し、多文化多世代共生のまちづくりを目指して取り組んできた「向島ニュータウンまちづくりビジョン推進会議」も、3年目に入りました。少しずつ具体的な成果が積み上げられてきています。今年度は旧向島中学校跡地に地域交流拠点「むかちゅうセンター」が開設され、高齢者や障がい者、在日外国人や留学生、中国帰国者が主役となって活動するさまざまな事業が始まっています。本共同研究のメンバーも、それぞれの研究テーマに応じて学生たちとともにいろいろな活動に参画しながら、まさに実践的なコミュニティ研究を進めています。

地域パートナー

横江 美佐子さん
（公益財団法人京都市ユースサービス協会 京都市伏見青少年活動センター）



私たちは、若者の大人への移行支援のなかで、かれらが普段の生活の場を離れ、多くの人と出会う機会を大切にしています。それは、多様な価値観との出会いだけでなく、若者が困難に直面したとき「助けて」といえるつながりを増やすことでもあります。京都文教マイタウン向島ユースセンターは、地域の大人、大学生が若者と出会い、語り合う実践を行って来ました。この実践をともにふりかえり、若者と大人、そして地域が出会う意味を深めていきたいです。

宇治市における観光の質の向上方策検討研究
—インバウンド対応の質的向上を中心に

プロジェクト12
地域志向協働研究

学内研究員
2名
学外研究員
5名

研究代表者：森 正美（総合社会学部総合社会学科 教授）

宇治市においては、平成25年に「宇治市観光振興計画」を策定し観光まちづくりに取り組んでいます。観光交通対策、サイン計画など個別課題についても効果的な対応にむけて努力してきました。しかし計画のなかで謳われている「観光の量から質への転換」が十分に実現できていないと、とくにインバウンド対策についてはかなり遅れています。日本では平成25年以来インバウンドが急増し、その傾向は今日まで継続しています。しかしそれに伴う問題や変化が早くも現れています。他地域のインバウンド対策などを中心に学び、宇治市における対策の課題と方向性を整理します。

共同研究者

橋本 和也さん
（京都文教大学名誉教授）



通過型観光人口の増加ではなく、地域での「観光経験の質」の向上が求められている。昨年調査した「久留米まち旅博覧会」を参考に、宇治でも既存のツアーを改編し、期間を限り「茶・ウォーキング・芸術・歴史etc.」などのテーマ別に100の「ガイド・昼食付き体験まち旅」（各20名ほど）を提供すれば、これまでの通り過ぎるだけではない「質の高い」観光を経験してリーダーとなる新たな「交流人口」の獲得が可能であることを提案したい。

プロジェクト13
地域志向協働研究

高齢者ケアに焦点をあてた
多職種相互乗入型の研修プログラムの開発に関する研究

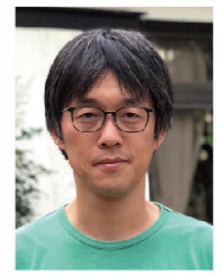
学内研究員
1名
学外研究員
7名

研究代表者：馬場 雄司（総合社会学部総合社会学科 教授）

少子高齢化社会の中で、制度の谷間に置かれた高齢障害者の地域ケアの問題や、認知症高齢者の介護を高齢のご家族（老老介護）や、障がいを持つご家族（障老介護）が担わざるを得ないという深刻な介護問題が発生しています。本研究では、障がい福祉サービスと介護保険サービスのスタッフたちが協働して、事例検討会や研究会を実施すると共に、アクティビティの実施をおして、認知症高齢者や高齢障がいの人の能動性を保障するためのアセスメント方法の開発を目指します。また、援助専門職、住民や学生を対象とした公開事例検討会や研修会を実施して、多職種相互乗入型の高齢者ケアの在り方を検討します。

地域パートナー

森田 浩史さん
（NPO法人おはな 代表）



当法人は、認知症などの困りごとが少なくなり自分の地域での生活が継続できるための支援をするために設立され、現在は民家を改修した少人数のデイサービスと、認知症の啓発活動を中心に運営をしております。高齢者一人ひとりのことを知り、主体的に過ごしていただける人と物の環境を用意することで、その人らしい人生を歩んでいただけることを目指しております。これから関わる研究によって新たな活動の可能性を見出し、働く者にとっても有意義な研修プログラムが開発できることを目指したいです。

プロジェクト14
地域志向協働研究

「遊び」を介して行う、子育て・子育てのフィールドワーク研究

学内研究員
5名
学外研究員
2名

研究代表者：柴田 長生（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

保育士をめざす学生と教職員が共同で活動している「遊びの実践研究会」も5年目を迎え、地域フィールドも、保育所を始め、子ども食堂・児童館・学内外の子育てイベントなどかなり広がってきました。出前を行う学生グループも学年を越えて4グループ程度が結成され、質・両共に発展してきました。これからも、地域内にある子どものための様々な場所へ「遊びの出前」を行うことにより、子どもたちや子育て支援関係者との交流を継続し、子どもの現実とニーズを中心に据えながら、地域における子どもの健全育成の方向や、保育士養成課程を持つ大学の可能性などについて、これからも追求し、研究していきます。

地域パートナー

谷口 昭雄さん
（社会福祉法人志心福祉会 はなぶさ児童館 館長）



子どもたちは、あそびを通して社会のルールや友達との関係、責任感や行動力を学びます。遊びは、子どもにとって、とても大切なものです。バーチャルではない、生身の人と人との関わりの大切さや自分たちで工夫しながら遊ぶことの大切さを「やんちゃワールド2019」でたくさん学びました。手作りで工夫して遊ぶことを子どもたちに教えてくれた学生に感謝！『遊びの出前』は、現在の子どもたちの状況改善につながると信じています。

プロジェクト15
地域志向協働研究

「宇治学」副読本作成による地域協働型教材開発と
評価・改善に関する実証的研究

学内研究員
5名
学外研究員
3名

研究代表者：橋本 祥夫（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

宇治市全市の小中学校で実施する総合的な学習の時間「宇治学」の副読本は、2018年度で3年生から9年生（中学3年生）までの副読本がすべて出来上がり、各校で実践されています。本研究では、研究協力校を中心に、副読本を活用した授業実践と地域協働型学習の教材開発、また、質問紙調査による学習効果の実証的研究を行い、地域協働型学習のモデル化を目指しています。今年はこのこれまでの成果をまとめた本を出版し、これまでの取組の成果を広く市民に発信していきます。

地域パートナー

渡邊 和孝さん
（宇治市教育委員会 教育支援センター学校教育課 副課長）



『宇治学』の副読本作成ならびにその活用に係る、京都文教大学との共同研究も今年で6年目を迎えます。関係する皆様のご支援・ご協力をおもちゃして、本年3月、小学校3年から中学校3年まで、7つの学年の副読本が完成しました。児童・生徒がこの副読本を活用することで、ふるさと宇治のことをより深く知るとともに、さまざまな課題に気づき、その解決に向け、主体的、創造的、協働的に取り組んでくれることを期待しています。

プロジェクト16
地域志向協働研究

防災・減災の啓発に関する研究

学内研究員
5名
学外研究員
2名

研究代表者：澤 達大 (総合社会学部総合社会学部 准教授)

宇治市では、平成30年10月に「宇治市くらしの便利帳」にて、ハザードマップを作成し、市内全世帯の各戸に配布されました。しかし、普段歩いている道も「地震が起きたら」、「真夜中の停電時だったら」という視点で歩いてみると、多くの気づきがあると思います。そこで、ハザードマップでは表現しきれない、地域のリスクを「マイ防災マップ」という形で落とし込み、実際の避難の際に役立てていただくと共に、本学学生と共にまち歩きを行い、地域の課題を共有することで、新しい視点や意見の交換が活発に行われ、地域の活性化にもつながると考えています。

地域パートナー

馬場 隆さん
(宇治市危機管理室)



本市では、「自分たちのまちは自分たちで守る」という「自助、互助・共助」の重要性を啓発しています。マイ防災マップの作成を通じて、災害をわがこととらえらると共に、地域のつながりをより強固なものとし、地域の防災力の向上に資するものと期待しています。また、学生にとっても、地域のまち歩きに参加してもらうことで、世代の離れた方との交流ができ、お互いにより経験となるのではないかと考えています。

プロジェクト17
地域志向協働研究

産業メンタルヘルス研究所主催ワークショップを
地域貢献に還元するための調査研究

学内研究員
3名

研究代表者：中島 恵子 (京都文教大学産業メンタルヘルス研究所長)

地域の中小企業の皆様が健康に働き続けるための企業研修を提供するために、本年度は、京都文教大学で働く人を対象に8つのワークショップを開催しアンケートを実施します。アンケートの結果から健康に働き続けるためのニーズを分析し企業研修の内容を作り上げたいと思います。第1回目のワークショップは「記憶」がテーマでした。アンケートでは、自分の睡眠、栄養、運動、注意力、処理速度に関心の高さが示され意識が変わったとの感想が多く、記憶の背景にある脳の機能への意識が高くなった結果となりました。

地域のみなさんへ



本年4月に京都文教大学に赴任しました臨床心理学科の中島恵子と申します。地域の中小企業で働く人が健康に働き続けるためのお手伝いをさせて頂ければと思っています。働き方と休み方について、脳が健康であるためにはどのような脳の使い方が良いかをわかりやすくお話させて頂ければと思います。どうぞ宜しくお願いします。

プロジェクト18
地域志向個人研究

生きづらさを抱えた本人と
自死遺族のサポートについての実践的研究

学内研究員
1名

研究代表者：松田 美枝 (臨床心理学部臨床心理学科 准教授)

国を挙げての自殺対策により自殺者数は減少しているものの、若者の自殺は減少しておらず、その割合は増加しています。本研究では、年1回、自死遺族を招いての公開講座を実施するとともに、昨年度は京都いのちの電話との共催による「生きづらさでつながり『生きづらい』と言えるつどい」を実施して、生きづらさを抱えた若者に対する働きかけを行いました。最終年度となる今年度は公開講座に加えて、11月出版予定の「地域協働シリーズ(仮題)」第2巻において、研究成果をまとめ公表いたします。さらに、地域の諸団体と連携し、広く生きづらさを抱えた市民の支援や、支援に当たる対人援助職の現任者教育につながるよう展開していきます。

地域のみなさんへ



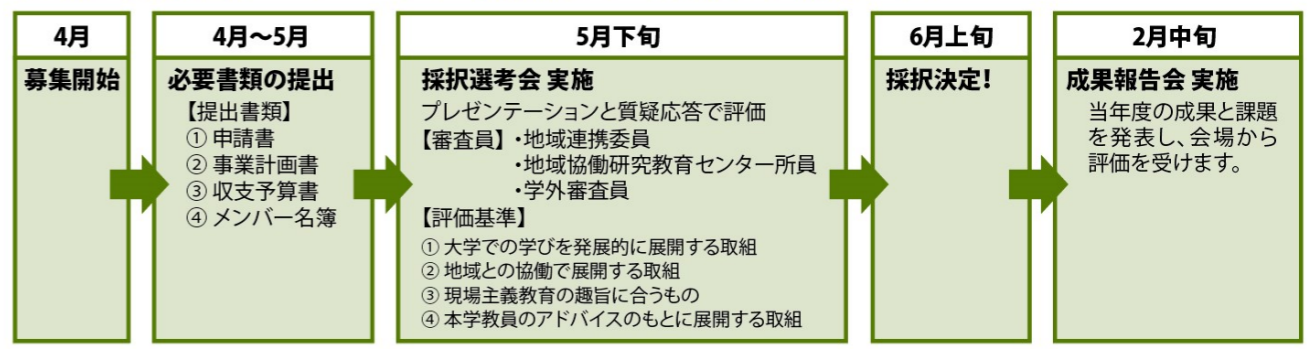
現在では年間自殺者数は2万1千人を下回りました。自殺をする人が1年間で2万人以上いるということは、毎年、その数倍、自死遺族が増えているということを示しています。家族を自殺で亡くすとは、どのようなことなのでしょう。自殺で亡くなる本人も、その遺族も、別世界にいる特別な人ではなく、ごく身近にいる人たちです。私たちはその声に耳を傾けて、自分たちにできることを、たとえば些細なことであっても実践する必要があると考え、当事者をお招きして公開講座を実施しています。

学生が自ら、地域の課題を見つけ、その解決策を模索する取組み
地域連携学生プロジェクト

「地域連携学生プロジェクト」は、地域を対象とする学生の自主的活動のなかから、地域特性を活かしつつ、成果が期待できる取組みをプロジェクトとして選定し、支援、助成しています(2007年度～2018年度採択プロジェクト数：延べ82団体)。地域に根ざし、地域に学び、地域への貢献を目指す本学の教育研究目標を達成するために、まちづくりや地域おこしなどの学部、学科を超えた主体的な取組として、2019年度は5つのプロジェクト(継続4件、新規1件)が採択され、現在活動を進めています。今回は、今年度採択のプロジェクトを、活動の概要とプロジェクトメンバーとして活動を行う学生たちのコメントを中心に紹介します。

※ のマークがついている団体は、SNSで活動を発信しています。
(: Facebook : twitter : Instagram) 検索いただき、ぜひ最新情報をご覧ください。

地域連携学生プロジェクト 採択までの流れと年間スケジュール



宇治☆茶レンジャー

学生が宇治茶について学び、そこで気付いた宇治茶の魅力を広く地域に発信していくプロジェクトです。地域にも根付いてきている「宇治茶スタンプラリー」の実施をはじめ、宇治茶に触れるイベントやお茶の淹れ方のワークショップなどを展開していきます。これまでも実施してきた「聞き茶巡り(参加者がお茶屋さんを巡り、店主さんとの会話と美味しい宇治茶を味わうイベント)」を、2016度から学生ガイド付きのツアー形式に変更し、まちの魅力をさらに味わえる内容になっています。開催10周年の迎える「宇治茶スタンプラリー」では、記念企画を予定しています。



最新情報はこちら メール:ujichale@gmail.com

参加学生の声



宇治☆茶レンジャー 代表
小山 翔 (臨床心理学部 臨床心理学科 3年次生)

宇治☆茶レンジャーは今年で10年目の団体です。10年も活動していると地元の方などに名前を覚えてもらっていたり、いろいろと声をかけて頂くことも多くあります。長く続くことで、内容がマンネリ化したりしないよう、またずっと応援して下さる「宇治☆茶レ」ファンの皆さんにもさらに喜んでいただけるように、いろいろと工夫しています。テーマにこだわった聞き茶巡りガイドのレベルアップを目指したり、「チーム茶イールド」による子ども向けワークショップの開催など新たな企画にも挑戦しています。これからも宇治☆茶レンジャーの応援、どうぞよろしくお願いします

KASANE O (カサネオ)

「ファッション」を通じて幅広い世代が交流できる場を提供することを目的に、結成した2年目のプロジェクトです。着なくなった服(若い頃に着ていた服)を「思い出」と共に、高齢者から提供いただき、それに学生が今の感覚で着こなしを考え、ファッションショーや展示会、雑誌などで紹介していきます。服を「物」としてだけでなく持ち主の「思い出」という付加価値を付け発信することで、人と人を繋ぐ媒介物となり、超高齢社会といわれる今、世代を越えた地域コミュニティの形成に繋がると考えています。



■ 最新情報はこちら メール: kasaneo.2018@gmail.com

●●● 参加学生の声 ●●●

KASANE O

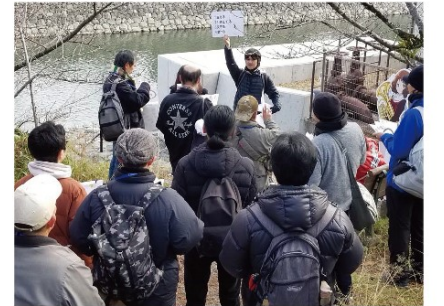
小宮山 葵紗 (総合社会学部 総合社会学科 1年次生)



私はサークル紹介でKASANE Oの「古着を通じて多世代交流を行う」という活動に興味を持ち入りました。自分たちで、イチから企画イベントを作り上げていくことが大変な分、成功したときはとても嬉しいです。また、高齢者の方々と関わる機会があるため、違った視点で物事を見ることができました。先輩方みたいになれるように、そして衣服を通じて高齢者と学生が繋がれるきっかけをつくることのできるように頑張っていきたいです。

響け! 元気応援プロジェクト

宇治を舞台にしたアニメ作品「響け! ユーフォニアム」を通して、地域とアニメファンをつなげる取り組みを行っています。活動内容はプロジェクト発足当初から実施しているファンを対象にしたキャラクターの誕生日イベント、地域の子どもの対象にしたワークショップ、聖地巡礼を目的に宇治へ訪れたファンの居場所作りなどにも力をいれています。また宇治市(観光振興課)、宇治市観光協会をはじめ地元商店街や企業と連携しながら行政への提案や企業主催の関連イベントへの協力なども積極的に行っています。そして「地域ぐるみで作品を応援」をドンドンしていきます。

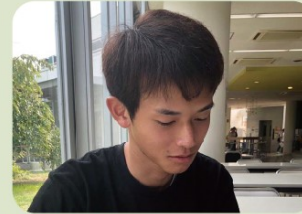


■ 最新情報はこちら メール: hibipii@gmail.com

●●● 参加学生の声 ●●●

響け! 元気応援プロジェクト 代表

山岡 玄弥 (総合社会学部 総合社会学科 3年次生)



響け! 元気応援プロジェクトもおかげさまで5年目を迎えることができました。私たちの団体はアニメ「響け! ユーフォニアム」の舞台である宇治で地域の方やファンの方に楽しんでいただけるようなイベントの企画・考案をし、運営しています。最近では、ファンの方からのアイデアをイベントに起用したり、カフェを開いたりなど新しいことにも挑戦しました。熱狂的なファンの方から刺激を受けながら、今後も宇治を盛り上げていきたいと思っています。

商店街活性化隊 しあわせ工房 Canvas

私たちは宇治橋通商店街振興組合のご協力のもと、宇治橋通り商店街の活性化活動に取り組んでいます。商店街イベントに参画し、子ども向けブースや周遊イベントなどの企画をしています。今年度は、まちあるきイベント「宇治ロゲイニング」の開催に加え、気軽に誰でもをコンセプトにした「配布版宇治ロゲイニング」も実施しています。また、グルメ冊子の作成にも取り組んでいます。基本情報はもちろん、お店や店主さんについてのエピソードなどを掲載していきたいと考えています。今年度も多くの新入生を迎え、それぞれが楽しみながら活動に取り組んでいきます。



■ 最新情報はこちら メール: canvas.uji@gmail.com

●●● 参加学生の声 ●●●

商店街活性化隊 しあわせ工房 Canvas 代表

大當 一輝 (総合社会学部 総合社会学科 3年次生)



本学のオープンキャンパスでCanvasの活動を知って、入学後はCanvasに入ろうと決めていました。特に商店街に興味があったかと言われると、そうではありませんでしたが、活動をしていくなかで宇治橋通り商店街が身近な存在になっていくことに心地よさを感じるようになりました。今年は代表として先輩方から受け継いできた想いを次の代にしっかり繋ぐために頑張りたいと思います! そして活動を通して、知ることができた商店街の魅力をどしどし伝えていきたいと思っています!

REACH

私たち『REACH』は「当事者」をキーワードに、様々な人々のあいだの「見えない壁(障壁)」を、交流や体験・対話などを通して、少しずつ取り払うことをひとつの目標とし、多様な人々が、共に生き・共に幸せを感じられる社会(=「ともいき社会」)のあり方を、地域の皆さんと一緒に日々考えています。今年度は、依存症の当事者の方々と、地域のバザーでアクセサリーの販売をおこなったり、福祉施設でレクリエーションの企画や運営をおこなったりしました。また、9月には「ブラインドカフェ」の開催を、11月には京都文教大学の学園祭「指月祭」への出店も予定しています。



■ 最新情報はこちら メール: reach2019@stu.kbu.ac.jp

●●● 参加学生の声 ●●●

REACH 共同代表 高橋 直人 (臨床心理学部 臨床心理学科 3年次生/左)

中村 詩帆 (臨床心理学部 臨床心理学科 4年次生/右)



「私たち」は、だれしも「私たち」にしか語り得ない《言葉》をもっています。多様な人々とのかわり合いを通して生まれる「多様な《言葉》のつながり」から、地域社会の新たな「可能性」を考えていけたらと思います。(高橋)

依存症に関心を持ち学部で学んでいましたが、地域における施設建設への反対運動などに触れ、学問と現場のギャップを強く感じたことから、団体を立ち上げました。人と人とが真に出会い、体験を通して理解を深めあう場所を作りたいと思っています。(中村)

地域を拠点に活動するプロジェクトは他にもいっぱいあります！

地域で活躍する学生たちの取組紹介

前項で紹介した地域連携学生プロジェクトの他にも、本学には地域へ出て、地域と活動する学生団体が多数あります。学内のサークルや、学生や地域住民からなる実行委員会形式のもの、また、本学教員が顧問を務める研究会から発足したものなど形式は様々です。本学のある宇治市や、最寄り駅のある京都市伏見区を中心に、地域のニーズや課題に併せた取組が行われています。ここでは、それらの地域活動の一部を紹介します。

掲載プロジェクト以外にも、地域の町内会や自治会からの依頼を受け、夏祭りや地藏盆、お楽しみ会などへの出演・出展等も多く、沢山の学生が地域と関わる機会を持っています。



↑本学軟式野球部による「子ども野球教室」の様子

大学れもねいど

“れもねいど(Lemon-Aid)”は、宇治市の認知症事業のイメージである「れもん(Lemon)」に“手伝う・援助する”という意味を持つ「えいど(Aid)」という単語を組み合わせたネーミングです。私たちは“れもねいど”に参画し、認知症当事者の方々とのグループミーティングやお茶摘み、大学れもんカフェなどに取組んでいます。認知症当事者の方々のコラボレーション活動・研究を行い、「認知症にやさしい地域」を実現するために、専門分野の現場に入りながら、地域に根ざした活動を目指しています。



参加学生の声

大学れもねいど

土井 晨之介（臨床心理学部 臨床心理学科 3年次生）



私は実際に認知症の当事者の方と関わる機会がなかったので、とても良い機会になりました。認知症と診断される人全てが、同じ悩みを持っているわけではないということも、この活動を通して気づくことができました。また、出来ることと出来ないことも人によって違うので、本当に必要な援助が大切だと気付きました。これからは当事者の方一人一人がどういったことで困っているのかを考えて、その中で何を自分ができるのか考え行動に移していきたいと思います。

子ども学習支援

一般社団法人マキシマネットワーク、NPO法人まきしま絆の会、宇治市と本学が連携し、地域を志向した教育研究を行っています。毎週月曜日の放課後、会場のコミュニティカフェ「Reos 横島」では、子ども達と学生の熱気に包まれ、学習支援に一段と力が入ってきます。また、本研究につなぐ「子どもつながり食堂」の教育研究を通して、こども教育心理専攻生を中心とした学生スタッフが児童理解について実証的に学びながら、子どもと信頼関係を構築し、親と子の絆づくりや子ども同士、保護者同士の「つながり」に貢献することを目指しています。



参加学生の声

子ども学習支援

長岡 百香（臨床心理学部 子ども教育福祉心理学科 4年次生）



私がこの活動に参加して4年目になります。活動は週に1回ですが子ども達との関わりを通して子ども達の沢山の笑顔や成長する姿を見ることができました。また、イベントなどは学生が主体となって企画実践しています。様々なイベントを企画実践する中で、物事を自ら進めていく力が身についたと感じています。子どもが好きな人や将来子どもに関わる職業に就こうと考えている学生には、とても良い経験になると思います。ぜひ一度参加してみてください。

遊びの実践研究会

本研究会は、教育福祉心理学科保育課程で学ぶ学生が中心メンバーとなり、「遊び」について考えたり、自ら童心にかえり遊ぶ事を体験しています。活動目的は、遊びの面白さをとことん追求し遊びの引き出しを持つために、保育者としての技術や子どもが好む遊びについて考えられる機会を増やす事です。学内を飛び出し地域での活動場所も増え、これまでに保育園等や児童館に出かけワークショップを開いたり、イベントを盛り上げる機会を頂きました。今後も地域の子ども達とたくさんふれあいたいです。皆様にお会いできる事を楽しみにしております。



参加学生の声

遊びの実践研究会 子ども食堂つなぐ 学生ボランティア活動 代表
夏山 世椰（臨床心理学部 教育福祉心理学科 3年次生）



私は、去年から子ども食堂つなぐに参加させていただいています。初めは、つなぐ主催のキャンプにお手伝いとして呼ばれ参加し、子どもたちと関わりました。キャンプ以降はつなぐに参加し、月末に行う誕生日会の仕切りを任せられました。苦労したことは子どもとの関係性です。やはり、家庭の事情で関りが難しいこともあります。つなぐの代表の方に学生のまともな役になってくれないかと言われた時は、嬉しかったです。このような活動に参加させて頂くことは、とてもいい経験になります。今後も子どもたち、地域の方々と更なる関係性を築いていきたいと思っています。

子ども臨床研究会すきっぷ

すきっぷプログラムでは、発達障がいを抱え、学校への適応や対人関係につまずいている小学年2年生から4年生の子どもと保護者を対象としたグループ療法を心理専門スタッフのもと、学部生・院生が中心となって行っています。子どもたちは、遊びや運動、グループ活動を通して自信や協調性を高め、子どもたちの全般的な発達の支援となることを目指しています。また保護者に対しては、親同士の交流の場を提供し、日常生活で周囲の理解や協力が得られず孤立しやすい親たちの情緒的支援を目的としています。



参加学生の声

子ども臨床研究会すきっぷ

瓦家 満（臨床心理学研究科 博士前期課程 1年次生）



その日の活動内容は院生・学生が会議を行う中で、参加している子どもの発達面などを考慮しながら決定します。しかし、私たちが会議の中で想像することができないような遊びが子どもたちの中で生まれることがあります。その度に、子どもは私たちが想像する以上の発想力や創造力を持っていることを教えてくれます。私は子どもと接する中で、発達障がいという枠を超えた子どもが持つ力に魅了されています。また、育児を行う親の不安を知ること、親もひとりの人として悩み、試行錯誤していることを改めて感じています。

学生防災支援サークルイーサポ

私たちは、2011年3月11日に起きた東日本大震災後に「自分たちにも何かできないか、できることがあるんじゃないか」との思いから学生有志でこの団体を立ち上げ、「防災・減災」をキーワードに学内や地域で活動を行っています。主な活動内容は、災害ボランティアの運営・参加や、学内の防災設備のチェックなどを行っています。また、地域の防災訓練や小・中学校での防災関連のイベントにも参加しています。そのほか、京都市内の大学生消防防災サークル「京都学生FAST」に参加し、防災についての啓発活動も行っています。



参加学生の声

学生防災支援サークルイーサポ 代表

中野 宗一郎（総合社会学部 総合社会学科 3年次生）



今年で9年目を迎えるイーサポですが地域との関わりや学校との連携も増え、活動範囲も広まりつつあります。多くの活動を通して防災に興味を持ってくれる人が少しでも増えればいいなと思っています。私が印象に残っているのは、ボランティア活動や地域での活動の際に「ありがとう」という感謝の言葉をいただいたとき、活動のやりがいを感じます。私たちも、支えてくださる皆様への感謝の気持ちを忘れず、様々な活動に挑戦しながら防災を広めていきたいと思っています。

ママさんサポーター

本学教員が代表を務める「助け合いの子育てネット」による、3歳未満の乳幼児を抱えたご家庭を支援する取組で、今年度で17年目を迎えました。学生が、サポーターとして週に1回2時間、受入れ家庭に訪問し、お母さんの目が届く範囲で、簡単な育児補助等を行います。母子の気分転換の機会をつくるとともに、学生が子育ての現場を少しでも経験し、自身の将来の子育てをよりよくすることも目的としています。“ママさん(現場者)”と“サポーター(未来の育児者)”双方が助け合い、子育てをよりしやすくなる環境づくりを目指します。



●●● 参加学生の声 ●●●

ママさんサポーター

作道 美優 (臨床心理学部 臨床心理学科 1年次生)



先日、一緒に遊んでいた時、お子さんの頭が私の顔にぶつかりました。私が痛がっていると、絆創膏を持ってきてくれ、顔に貼ってくれました。幸せな気持ちになり、子どもの純粋さを実感しました。私は子どもと接した経験が少ないので、どういう風に遊ぼうかなど、構えていましたが、いざ対面してみると「これで遊ぼう」と人形やおもちゃを持ってきてくれ、自然と距離を縮めることができました。他のお子さんともうまく遊べるようになってきました。お子さんにとって重要な時期に、一緒に過ごせることを嬉しく思います。

京都文教大学バスツアーズ

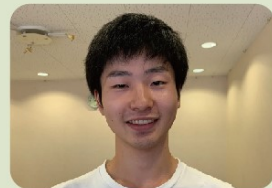
大学に隣接する向島ニュータウンは、高齢者の一人暮らし世帯が多く、住民同士のコミュニケーションも希薄になりつつあります。一人暮らしの高齢者に、外へ出て他の住民と交流する機会を、と始めたのが本プロジェクトです。学生がバスツアーを企画、参加者の意見をもとによりよいプランを作り、ツアー当日は添乗員を務めます。今では向島在住の中国帰国者や福島からの避難者の方々にも参加いただいています。今年度も、(公財)大学コンソーシアム京都/京都市「大学地域連携創造・支援事業(学まちコラボ事業)」の採択を受け、地域のお祭りへの参加など幅を広げて活動を行います。



●●● 参加学生の声 ●●●

京都文教大学バスツアーズ

園山 倫太郎 (総合社会学部 総合社会学科 1年次生)



この活動を通して、私は高齢者の方々の日々の生活に楽しみを作ることが出来ていると感じています。年に5回と、バスツアーの回数は決して多くはありませんが、多くはないからこそ、一回一回の楽しみがより大きくなると思っています。また、高齢者の体調面や身体面を考え、階段や段差の少ない寺院や移動距離の短い観光地を選ぶなど無理のないプランを作っています。私たちが企画したツアーに参加していただき、感謝の言葉を下さったり、笑顔を多く見せてもらったりすることで私もやりがいを感じています。

Project Japan

私たちProject Japanは、京都に住む留学生のサポートをしています。向島学生センターの日本語教室やイベントの企画を通して留学生と交流を深め、彼らの日本生活がよい思い出となるようにしたいと考えています。また、日本人学生や地域住民にも、英語以外の言語に触れたりいろいろな文化を体験してもらいたいと思っています。活動は自由をモットーにしていて、メンバー間のコミュニケーションを大事にしています。誰でも自分でイベントを企画し、リーダーとなって活躍することができます。



●●● 参加学生の声 ●●●

Project Japan 代表

山下 美羽 (総合社会学部 総合社会学科 3年次生)



イベントの内容はさまざまで、映画祭、地域のお祭りへの参加、鍋パーティー、日本文化体験などがあります。イベントのスタート直後は、留学生と日本語ではなく英語で話したりもしますが、イベントが終わる頃には「本当に楽しかった」「ありがとうございます」「もっと日本語を勉強しますので、次はもっと日本語で話したいです」など、一生懸命日本語で喋ってくれます。また、イベントが終わるたびに、留学生から「次はいつ?」「次は何をするの?」「〇〇やってみたいです!」といった声をいただいています。

活動報告

精華町×京都文教大学・短期大学 包括連携協定締結記念 精華ともいくフェスタ2019

2019年7月14日(日)に実施しました。

2019年2月21日に精華町との間に締結した包括連携協定の記念事業として「精華ともいくフェスタ2019」を開催しました。精華町は子育て世代にやさしいまちづくりを進めており、協定の締結当初から「育児って楽しい!」と思ってもらえるような子育て支援に関するイベントをしたいという相談をいただいていた。協定締結後、精華町と京都文教大学・短期大学の間で「フェスタ」の開催に向けて協議と準備を進め、7月14日(日)、精華町地域福祉センターかしのき苑にて、精華町と本学の共催で行いました。



柴田長生先生による講演

第1部は、京都文教大学臨床心理学部教育福祉心理学科長の柴田長生先生による「子供は育つ・子どもと遊ぶ～その秘密、少しだけお教えします～」というタイトルの講演会です。今回の「フェスタ」は託児スペースも設けましたが、未就学児童を育てる子育て世代を主な対象とし、「親子で一緒に参加する」ことを目的としました。そのため、堅苦しい内容ではなく、育児期の「あるある」具体例を示しながら、子どもの目線、親の目線で「発達」の過程をわかりやすく解説されました。それでも途中、子どもたちが飽きてくると、演台から客席の方へ入り、「子どもにも必ずバカ受けする遊び」を実践するなどして、会場を和やかにしながら、講演を進行しました。



講演中、先生が客席に入り子どもたちと一緒に遊ぶ場面も

第2部は、ミニコンサートです。テノール歌手で東宝ミュージカル『レ・ミゼラブル』などにも出演されている持木悠さんと、ピアノ伴奏に常田陽子さんをお迎えしました。1曲目は持木さんが得意とするイタリアのカンツォーネの定番『オー・ソレ・ミヨ』を披露。突然の音楽家の登場に、子どもたちは唖然としていましたが、その後『パプリカ』など子どもたちもよく知っている曲が歌われると、子どもたちも歌に合わせて踊っていました。



テノール歌手の持木悠さん

続いての第3部は来場者参加型のワークショップです。第2部で素敵な歌声を披露いただいた持木さんが、歌に必要な発声法や呼吸法などを教示し、それを実践したのちに、最後は会場全員で『オーシャンゼリゼ』を歌いました。持木さんは学生時代に保育園でアルバイトをしていた経験もあり、終始子どもたちにも気を配りながら、コンサートやワークショップを進行し、最後の合唱の際は来場者も運営スタッフもみな笑顔で大きな口と声で歌っていたのが印象的でした。



教育福祉心理学科で子どもの心理を学ぶ学生たちも加わり、会場を盛り上げます

当日は、精華町の木村要町長はじめ、精華町役場のみなさんも多数お越しいただきました。また、京都文教大学臨床心理学部教育福祉心理学科保育福祉心理コースの3年次生も託児や会場のボランティアで協力し、保育の現場を体験しながら、来場した子どもたちと一緒に楽しい時間を過ごしました。



最後は、会場のみなさんと、『オーシャンゼリゼ』を大合唱しました

今後も、京都文教大学・京都文教短期大学は、このような催しの企画を通して、精華町との繋がりを深めていきたいと思っています。